

## マッハとニーチェ—世紀転換期思想史

木田 元 (講談社学術文庫 2266, 2014)

- 2 ロシア革命がそろそろ日程にのぼってきていた世紀転換期に、オーストリアの社会民主党員やスイスやイタリアに亡命中のロシア社会民主労働党員のうちに、マッハやアヴェナリウスの経験批判論を根底に据えてマルクス主義の革新を企てるフリードリヒ・アードラーやボグダーノフ、バザーロフといった連中が出てきて、影響力を強めていった。レーニンも一時期このいわゆる「マッハ主義」に共感を示したと言われるが、しかし彼は、労働者や農民を結集して革命を起こそうというときにこんな洗練されたイデオロギーは有害であり、もっと大雑把な分かりやすい理論が必要だと考え、マッハ主義、つまり経験批判論を批判の槍玉に挙げたのである。
- 23 アインシュタインの相対性理論も、ウィーン学団の論理実証主義も、ウィトゲンシュタインの後期思想も、ハンス・ケルゼンの実証法学も、どれもこれもマッハの思想の何らかの影響下に生まれたものであることがわかる。  
同時代にこれほど広範な影響をおよぼしたマッハが、20世紀前半にどうしてこれほど無視されたのか不思議なくらいである。
- 25 ニーチェもマッハも進化論に影響されそれが同時代性を規定している。
- 31 蒸気機関を開発して改良していったのは、イギリスの技術者、というよりも伝統的な徒弟制度の中で育った職人たちであり、彼らには数学や力学の素養などまったくなく、科学者グループとの関係もなかったようである。よくよくの例外だったジョン・スミートンとジェームズ・ワットでさえも、せいぜい初等中等教育を受けた程度だったという。しかも、当時は職人の発明を保護する制度がなかったため、彼らは自分たちの発明を公表するのを嫌がり、秘伝として守ろうとしていた。
- 32 カルノーを育てたのがエコール・ポリテクニクである。—中略—ここでは厳しい入学試験をくぐり抜けてきた学生に、二年間は数学・物理学・化学といった基礎科目だけを教え、その基礎の上に3年目になった技術を学ばせた。こうして近代工学、近代テクノロジーが成立することになり...
- 33 ニュートンにあっては、「自然哲学の数学的原理」は神学的原理によって補完されているのである。
- 37 ニュートン力学を完成させたのもフランスである。
- 42 (エネルギー保存) というような試みの根底に、たとえばシェリングの「磁氣的・電氣的・化学的現象、さらに有機現象さえもが互いに交錯し流通しあって、全自然界にわたる一つの巨大な連合体をかたちづくっているものようである」といった形而上学的な根本思想が潜んでいた。—中略—ロマン主義的な自然哲学に促されて力学的自然観が成立したことになる。

- 46 産業革命の粋を集めた第一回万博の開催 (1851) と決定論的な力学的自然観の成立がほとんど同時期だったというのも象徴的である。  
—中略—  
マッハやニーチェがそのなかで育ち、やがてそれに反発しながらその思想を形成してゆく19世紀中葉の思想状況というものは、この「水晶宮」と「22が4」(ドストエフスキーがいう力学的自然観から帰結する決定論的世界観「石の壁」)によって象徴されたのであった。
- 56 デュルケームは社会が思想を規定する(したがってカントのいうアプリオリも)のだから社会構造の分析である社会学こそが一切の精神科学の基礎学であるとした。これを社会学主義と呼んだ。
- 62 新カント派 ヘルムホルツなどが精神のアプリオリな機構を主張するカントの認識論によって生理学を基礎づけようとしていたのに力を得て、哲学者たちはカント哲学をその認識論的側面に限定し、それによって経験諸科学の方法論を認識批判論に基礎づけ、もう一度科学に君臨しようと企てたのである。
- 73 われわれは物理学説における価値あるものと一緒に、必ず誤った形而上学説の何がしかを受け入れてしまっている。この形而上学的夾雑物は、その物理学説が膾炙している場合には、堅持されるべきものからの剥離がことに困難である(感覚の分析)。
- 81 1898年にマッハは旅行中に列車内で脳卒中に襲われ、右半身が不随になってしまった。好きだったオルガンもピアノも弾けなくなった。だがそのあとも長男の献身的助けで本を執筆している。死去は1916年)
- 83 ヘルムホルツの力の保存についての序論で  
「理論的自然科学の仕事は、諸現象の単純な力への還元が完成され、同時にそれが現象に許される唯一可能な還元の仕方であることが示されたならば、全うされることになるであろう。」  
この言い方からも明らかなように、ヘルムホルツは力学法則をアプリオリな根拠から導き出せる必然的真理と考えようとしているのである。
- 86 ヴントの物理学の公理、その最初のものとして「自然におけるすべての原因は運動の原因である」という命題を立てる。この命題は無論経験から得られたものではないし、むしろ経験には反する。感性的経験だけに従うなら、自然における変化はすべて質的变化であり、ある質を持った対象が消え、それとは違う質を持った別の対象が出現することである。だが、こういう消滅や出現は、存在者の同一性や物質の不滅性に反する。ところが  
「対象が眼前で変化しながら、しかも同一にとどまる唯一の場合がある。それは運動である。運動においては、物体相互の相互関係が変わるだけで、物体は同一にとどまるからである。ゆえに、われわれは、あらゆる変化を、対象が同一性を保つと考える唯一の変化—運動に帰着させねばならない。」

こう言えば、あたかも力学法則を、自然認識のための最も基本的な概念である実体の概念と因果性の概念からいわば超越論的に演繹したかのように見え、当時の人々を十分に説得しえたであろう。19世紀の人たちにとって、自然現象がすべて力学的に解明され得るのは、やってみたらたまたまうまくいっということではなく、それには論理的必然的根拠があるのだと思われた。つまり、それは、力学の原理や法則が単なる経験的事実的な法則ではなく、幾何学の公理や定理のようにアプリアリな真理だからなのだ、と思われたのである。

こうして物理学の体系の中で力学が特権的な位置を占めることになる。

- 88 ところがマッハは「神学的、アニミズム的、神秘主義的観念」として質点や、当時それと同一視されていた原子や分子のような自体恒常不変な「実体」の観念、原因と結果の観念その他を見なした。

形而上学的観念とは、マッハに言わせれば、実は「われわれがいかにしてそれに到達したかを忘れてしまった概念」に過ぎない。

「力学の自然科学としての内容はどこにあるのか、われわれはどのようにしてそれに到達したのか、どのような源泉からそれらを汲みとったのか、それはどの程度まで保証された知的財産とみなすことができるのか」(「歴史と根源」初版序文)

- 90 力学的自然観を否定するということは、当時の物理学が究極の实在として大前提にしていた力学的世界、つまり絶対的な時空間内でそれ自体は恒常不変な実体=質点が運動しているとされる力学的世界を、単なる形而上学的な背後世界に過ぎないとして否定し去ることである。そうすると残るのは、これまでそうした背後の実体つまり物自体のわれわれ人間の感官への単なる現れ、「単なる現象」として蔑視されてきた感性的世界だけである。物理学の対象となるのも、この「単なる現象」に過ぎない感性的世界以外にはないことになる。

- 92 科学—物理学に限らず整理学や心理学をもふくめて—の仕事は、現象界を織り成すこれら感性的要素の関数的依存関係を、「最小の思考の出費でできるだけ完全に記述する」という〈思考経済の法則〉に従って記述することにある。(力学史)

- 95 こうして、力学中心主義的な古典物理学の体系が否認される。それに替えて提唱されたのが「現象学的物理学」である、

現象学的アプローチを「物理学から余分な非本質的付加物を追放し、すべての形而上学的要素を除去する試み」だと主張している由である。

- 98 経験論的立場から発想していた〈思考経済説〉は、進化論的認識論の立場に立つことによって新たな照明を与えられ、新たな基礎づけを得た。

- 99 真偽の絶対的な区別などなく、あるのは有効性の相対的区別だけだ...。彼は真理と虚偽のといった絶対的区別は認めず、それに替えて「認識と誤謬」という区別を採用する。

認識と呼ばれるものは、いずれも、直接になり間接になり生物学的に有益な心的体験である。そうでないのが誤謬である。

103 認識と誤謬は結果によってしか区別できない。

ヘッケルはヘルムホルツ派からは厳しく排斥された。

109 マッハは原子であれエネルギーであれ、現象を超えた実在と見ることには否定的であり、その意味ではアトミスティックにもエネルギーティックにも反対であった。このことはオストワルドも見抜いており、自分のエネルギーティックの同盟者としてはマッハに懐疑的であったらしい。

112 マッハは形而上学のことを哲学と呼んだ。したがってマッハ哲学などありえない。「あるのはせいぜい自然科学方法論と認識心理学である」

114 感性的一元論あるいは中性的一元論  
マッハにとっては、さまざまな函数的相互依属関係のうちに現れてくるこうした〈感性的諸要素〉だけで十分なのであり、それを担う実体的〈物体〉など必要ない。〈物体〉とは比較的恒常的に現れてくる要素複合体に与えられる「名称」に過ぎず、それを実体化したりしてはならないのである。

ただし

〈感性的諸要素〉と呼ばれているものはそのまま主観的な〈感覚〉とみてはならない。この〈感性的諸要素〉は、それがあある特定の函数的依属関係のうちに現れてくるとき〈感覚〉(Empfindung)になるのであって、それ自体としては〈物的〉でも〈心的〉でも〈客観的〉でも〈主観的〉でも、〈外的〉でも〈内的〉でもなく、〈中性的〉なものなのである。

119 現実と仮象の区別だけではない。マッハにとっては、現実と夢の区別さえも無意味になる。「極めて混沌とした夢でさえ。他の諸事実と同様、一個の事実であり」ある要素連環なのであって、現実との違いがあるとすれば、そこに現れる要素連環が実用的 (praktisch) に役立つかどうかの違いだけである (感覚の分析)。

123 W James の Radical Empiricism(1912)

157 〈志向的体験〉というフッサールの現象学の最も中心的な概念さえもがマッハに由来する...

フッサールはマッハやヘーリングの〈現象学的方法〉や〈現象学〉という用語は継承しながらも、彼らのもとでいわばその前提となっていた〈進化論的認識論〉は拒否するから、話はややこしくなる。—中略—

160 この世紀転換期には「純粹」という言葉が流行する。—中略—〈純粹〉という形容詞は〈經驗的〉、〈自然主義的〉、〈功利主義的〉などに対比して言われていることであり、いわば生や生活の圏域内での相対主義的な考え方に対して、一種の絶対性を求めようとする意志の現れであろう。19世紀後半、ダーウィニズムによって励起された自然主義的風潮に対して、世紀

転換期にそれへの過激な反動が起こったということになる。

フッサールの純粋論理学の構想も—中略—こうした動向の一環をなすものなのであろうが、そのフッサールが1920年代以降ふたたび〈生活世界〉(Lebenswelt)への還帰を企てる。これは、やはり前期に〈純粹論理〉や〈理想言語〉の構築を目指したウィトゲンシュタインが、後期になると〈生活形式〉(Lebensform)や〈人間の自然史〉や〈言語ゲーム〉を重視するようになる思想の軌跡—中略—とは偶然とは言えない近似性があり、まことに興味深い....

205

レーニンが批判したボグダーノフのマッハ主義: 物理的経験は「社会的に組織された経験」だから普遍性を持ち客観性を持つ。がいずれも経験であることに違いはないということから、〈経験一元論〉が提唱されることになる。

そして、経験の組織化の形式は決してアприオリなものではなく、結局は社会的なものである。

207

ボグダーノフは、こうした立場で、一貫した方法論を持って、集団の力によって、相互に矛盾のない統一的な経験の組織化が果たされたとき〈プロレタリア文化〉が実現されると考えたのであろう。

210

ところがボグダーノフは次のようにマッハを批判し「マッハ主義者」と呼ばれることをひどく嫌っていたらしい。

「技術的インテリゲンツィアが問題にするのは、集団的な実践ではなく実践一般でしかなく、その主体ははっきりとは定義されていなかったり、あるいは個人と考えられている。社会的な主体という考えは、いかなる技術的インテリゲンツィアの思考とも無縁なものである。この点に、技術的インテリゲンツィアの視点とプロレタリアートの視点の本質的違いがある。」

215

1931年に書かれたウィトゲンシュタインの手稿「文化と価値」

「私の思考は、本当は模造的でしかない。こう言っても、決して間違いではないと思う。私が新しい思想の方向を生み出したことなど、一度もないのではなからうか。それは、いつも誰かほかの人からもらってきたものに過ぎない。私はただ、明晰化の情熱に駆られて、すぐさまそれに飛びついただけである。」

217

〈語りうること〉と〈語りえないこと〉とを明確に区別し、しかも〈語りうること〉を一義的に明晰に語ることを求めていたこの時代のウィトゲンシュタインにとって、徹底して相対主義的なマッハが「むかつき」の対象だったであろうことはうなづける。—中略—理想言語の構想は自然主義的な相対主義をはっきりと越え出た超越論的立場に立つてのみ可能だったはずだからである。それを、彼はここでもう一度「ザラザラした大地」に立とうとしていることになる。後期のウィトゲンシュタインの〈自然史〉への固執も、〈生活形式〉(Lebensform)という概念も、マッハの現象学の思想的動機を承け継ぐものなのであろう。—中略—この転回はフッサール晩年の転回と軌を一にしている。

220